

河 奴

か

やつこ

3 7 号

令和 7 年 6 月

京都大学カヌー一部 OB・OG 会

熊本先生追悼特集

熊本先生、有難うございました	野崎 京子（旧姓 堀江）	－ 1
水頼先生とのご縁	紅林 健	－ 3
追悼 熊本先生	川上 純一	－ 5
ダンディーな熱血漢、熊本水頼先生を偲んで	四方 伸明	－ 7
瀬田合宿所竣工を共に祝ったカヌー部と医学部ボート部		
	上羽 康夫	－ 9
熊さんの思い出	清野 学	－11
現役時代の思い出	米田 憲二	－14
柔の人	福岡 賢正	－17
熊本先生を偲んで	小山 泰弘	－19
熊さんと向き合う旅	水嶋 勇	－20
ショートメッセージ	植田 賢太郎、小内 勝雄、中井 雅夫	－23
熊本先生を偲ぶ会のご報告		－25

現役寄稿文

主将挨拶	主将 福永 健太	－35
主務挨拶	主務 森川 宏亮	－37
モチベーション	3 回生 楠井 隆	－38
カヌー部生活 1 年を経て	2 回生 吉中 凌	－40
部員紹介		－41
戦績報告		－47
編集後記	小山 泰弘	－50

熊本先生、有難うございました

野崎 京子（旧姓 堀江）（1966 年卒）

熊本水頼先生が昨年 11 月 23 日に 98 歳でご逝去された。天寿を全うされたとも云えるが、私の心の中には、大変残念な気持ちがある。私は先生に何一つご恩返しが出来ていないのだ。先生とのご縁は主として私の医学部学生時代の数年、1962 年（京大カヌー部創部の前年）から 1965 年（東京オリンピック開催の翌年）であった。私は医学部 3 回生から 6 回生の頃で、オリンピック強化選手に選ばれながら中々練習時間が取れず合宿もままならず期待に応えられなかった。卒業後は、毎年 1 月 2 日の初漕ぎの式になるべく参加することだけの関わりであった。仕事と家庭で精いっぱいだったが、心の根底には常に熊本先生と京大カヌー部があった。

さて熊本先生は 1926 年生まれなので、少年時代・青年時代・壮年時代を激動の昭和時代に生きてこられたと云える。太平洋戦争をはさんで戦前・戦時中・戦後は価値観も政治も経済も大きく変わった。熊本先生も多彩なご経歴・ご経験を経て、1955 年に縁あって京都大学教養部教授の高木公三郎先生に会われ活動を共にし京都大学の講師に就任されている。

ところで当時、1964 年開催予定の東京オリンピックに日本としてカヌー競技に初参加することになっていた。カヌー競技の普及と選手育成、組織強化が喫緊の課題であった。高木公三郎先生は 1936 年ベルリンオリンピックの際にカヌー競技の視察に行っておられる。1940 年開催予定の東京オリンピック（世界状況のため幻に終わった）でカヌー競技を開催するためであった。結局それは 1964 年の東京オリンピックまで延びたことになる。熊本先生は研究や教育の仕事を抱えながら、上記のような事情で京大の一スポーツクラブの部長というにとどまらず、カヌー競技普及のため多くのエネルギーを費やしてこられた。東京オリンピックに際して先生はバイオメカニクスの専門家としてカヌー競技のトレーニングドクターを務められた。

さて当時の私たち京大カヌー部員には力を貸してくれる先輩はいなかった。多分、高木先生、熊本先生のご努力で多くの人脈とつながり、京大カヌー部や日本の学生カヌー界の発展につながったのであろう。その辺のことを、私たち学生はあまり理解してなかったのではないか。ここにその一端を述べたい。本格的な試合に使用できるカヤックなど殆ど無い時代に2企業からヤンマー艇、ノザワ艇というデンマーク製の木目の美しい艇を寄付していただいた。また熊本先生創設のドン・ドッジレガッタやその他の試合の度に当時の京都アリーナや藤田ファルトボートの社長さんが応援・見学にみえていた。きっとカヌー界に協賛して頂いていたのではないかと。ところで京大カヌー部創設以前から京大にゆかりのある大阪体育大学の教授や教官や学生の方々がカヌーに関わっておられた。漕法など指導していただいたように思う。最後に、熊本先生の奥様、桑野造船様には多大なご恩をいただいていたことはいまでもない。

私たち京大カヌー部員にとっては熊本先生にお会い出来たこと、ご指導を受けたことは多大な喜びであった。熊本先生、有難うございました。心よりご冥福をお祈り申しあげます。

水頼先生とのご縁

紅林 健（関西学院大学体育会カヌー部 OB）

水頼先生は京大さんの先生でもあり始めはお話しをする機会はなかったのですが3年時の相模湖でのインカレで京大さんと共にそれまで強かった関東勢に「関西恐るべし！！」と言わしめて大勝利をつかんだ頃から瀬田の琵琶湖漕艇場での試合に際して当時関学がお借りしていた京大さんの艇庫やコースで時にお話をさせていただきました。

お会いするときはあのニッコリとニヤリの混ざった優しいスマイルで近づいて来られました。また瀬田でのある大会の後、水頼先生のカヌーの研究のための人体実験で背中に何かバッグのようなものを背負わされて防毒マスクのようなものを装着して何本か漕ぎました。お役に立ったか否かはお聞きする機会を失ってしまいました。が卒業前には私の卒業後についてご心配をいただき琵琶湖近辺の企業を紹介していただきもう2～3年漕がないかというご提案をしていただきました。魅力的なお誘いで漕ぎ続けたい気持ちもあったのですがすでに就職先も決まっていたため丁重にお断りしました。

さらに下って2008年10月の関学カヌー部の50周年記念式典の来賓で来られた際に久しぶりにお話をさせていただき「あのころ僕は君に金メダルを渡す係だったような気がするなあー」と言って私を含み周辺の方々を笑いに包んでおられました。あちらの世界でまたあの水頼スマイルを浮かべた先生にお会いできればうれしいのですがバッグをせたらうて漕ぐのは勘弁していただきたいものです。

以上

追記)

水頼先生とはいろいろな思い出がありますが追悼文を寄稿させていただくにあたりそれらを整理して作成いたしました。私が大学に入って漕ぎ始めた頃は京大さんには清野さんという大エースがおられ私もその漕ぎや発

達した筋肉の部位を見て大いに参考にさせていただきました。その後も西村さんや小浦場さんなど強い選手がおられいろいろな大会でしのぎを削った良い思い出があります。もう 50 年以上前の思い出ですが連日激しい練習をしたせいか水頼先生の思い出と共に体が覚えている忘れられない記憶になっています。

熊本先生、有難うございました

追悼 熊本先生

川上 純一（関西学院大学カヌー部 OB 会 元副会長）

熊本先生のご逝去に深く哀悼の意を捧げます。

45 年以上前、私が大学 1 年生の時のことになります。試合の表彰式を終えた講評の中で、沈をし艇を離れ岸へ泳いだ学生の光景に触れ、熊本先生が艇を決して離れてはいかん、板子 1 枚下は地獄だと厳しく話され、艇を離れないこと、それがシーマンシップ、ウォーターマンシップの基本だと言われました。私はその先生のお姿を見て、京大の立派な先生がこんな風に話して下さるんだと、教えを心に刻みました。関西の学生はみな同じだったと思います。体格もご立派で、初めてジェントルマンと呼べるような方を見た気がしました。お声はよく通り、響きの良い、艶のあるお声だったと記憶が鮮明です。

卒業後、私達関学の塚本先輩の結婚式にも出席頂き、塚本君！とそのお声で呼びかけ、本当に嬉しそうにご挨拶をされました。17 年前関学カヌー部の創設 50 周年のパーティにも来賓としてご挨拶を頂きました。一昨年秋には、関学の私の同期で 1979 年に試合中に亡くなった清長君のご両親から寄贈されたフォア艇清月が、京大さんの艇庫に預かって頂いたまま 40 数年たってしまい、今日参列しています和田君、末信君が京大さんの艇庫へ伺った折も、水嶋副会長のご厚意で熊本先生のご自宅まで案内頂き、何よりお詫びをしなくてはならない中、温かいお言葉を頂きました。学連だった福山君は、韓国の学生をインカレに招待したその年に、他の学生と共にご自宅へお招き頂き、慰労して頂きました。

熊本先生には折々に本当に有難うございました。その福山君は、熊本先生は関西学生カヌー界の良きお父さんのような方だと申しております。水嶋副会長からは 10 年前に清月の事で初めてお会いした時、ドンドッチレガッタの深い歴史について聞かせて頂き、熊本先生は何とカヌーへの思いが深く、情に厚い方なんだろうと心を打たれました。京大の皆さんにはその先生の教え、ウォーターマンシップ、カヌーを愛すること、カヌーの

仲間を愛する事、それらがしっかりと受け継がれていると私は強く感じて
おります。

一昨年驚くような偶然から、京大同期の会いたかった仲間に卒業来で会
う事が出来、今では折々に盃を交わしております。今後も両校の友情が固
く結ばれ、先生の教えを継いでゆくものと確信しております。最後に追悼
四句を捧げたいと思います。

深まった秋のご逝去に。

澄む水に受けし教へは忘れまじ

京大の皆さんは。

師のもとに集ふ河奴水の春

瀬田はカヌーシーズンになりました。

春光やパドル煌めく湖の上

お声が心に残ります。

行く春にバリトンの声偲びけり

熊本先生、本当に有難うございました。

安らかな眠りをお祈り致します。

令和7年4月5日

関西学院大学体育会カヌー部 漕月会 OB 川上純一

ダンディーな熱血漢、熊本水頼先生を偲んで

四方 伸明（関西医科大学体育会カヌー部 OB 会長）

関西医大カヌー部 OB 会長として、先生にお世話になった 3 つのエピソードを捧げます。

最初は、昭和 53 年、関西医大カヌー部員の淀川での死亡事故です。当時カヌー部顧問で体育理論教授岡本勉先生はアメリカ留学中であり、裁判にもなったこの事故の対応は OB と大学、そして関西学生カヌー連盟会長の熊本先生で行われましたが、この経過で思いがけない出会いがあったのです。大学で対応して下さっていた学生部長の大山昭夫微生物学教授は舞鶴海軍機関学校出身でしたが、「四方！海軍ゆかりの出会いがあったぞ。熊本さんだよ。」との事。水の悲しい事故がきっかけでしたが、思いがけない戦中派最後の邂逅でした。

次に、熊本先生の還暦の会に招いて頂いた時。先生から自らの歴史を振り返られてのスピーチがありました。先生のお父様も臨席され西陣での会であったと記憶しています。先生は、高校で教鞭をとっておられ、松下村塾に見立てて教え子と世の中をひっくり返そうかと思っていたと語られ、その最中に、高木公三郎先生の講演放送を聴き感銘を受け翌日早々高木先生を訪ねた。と。

高木公三郎先生は京都大学の天文学教授・天文台長にして、ベルリンオリンピックボートエイト役員参加、ファルトボートとカヌーを日本に持ち帰り、運動・体育理論も導入されたという方で、私も教養部で運動生理・体育理論の講義を受け、岡本勉教授の筋電図研究に電気コードを付けた被験者として手伝ったりしていました。熊本先生のご経歴を追うとこの多彩な高木先生の専門分野の内 岡本教授と同じく運動生理・体育理論とカヌー競技の運営を継承されたことになるかと思います。

関西学生カヌー連盟の会長は、岡本教授から京都大学のカヌー部 OB の教授の方に引き継がれその後、計らずも関西医大病院で病理診断学病院教授・カヌー部顧問をしていた四方が委託され努めましたが、10 年前私が

定年を迎え顧問を脳神経外科の岩瀬正顕病院教授と交代する折、お声掛けした所、その交代の記念会に熊本先生が枚方までお越し下さいました。その時、私がずっと気がかりになっていたことを相談させて頂きました。それは、関西学生カヌー連盟の会長をまた京都大学カヌー部 OB にお返しせねば、との事でした。熊本先生は「今の時点では京都の OB には教授はいない。岩瀬君が脳外科の教授なら彼が後任でよいではないか」の鶴の一声で決めて頂きました。そのあと、なぜ教授在職者が東西の学生カヌー連盟会長にならなければならないか、学生による自主運営など、歴史を伺って納得致しました。

その会では、大阪府カヌー協会会長であった矢田節彦先生から「この会で最も楽しかったのは、熊本先生に再会出来たことだ。来てよかった。」との言葉を頂きました。

最後に熊本先生の御姿を拝見したのは、直接ではありません。テレビでシーラカンスの胸ビレの解剖をされているお姿でした。シーラカンスの胸ビレが魚類の上陸に繋がる動きをする 2 関節筋によるヒレの歩くような回転運動をすることに注目された解剖シーンであった様に記憶します。運動機能と筋肉の働きの進化を広く、深く探求しようというお姿でした。

半世紀の長きにわたり熊本先生にはカヌー他でお世話になりました。有難う御座いました。

瀬田合宿所竣工を共に祝ったカヌー部と医学部ボート部

上羽 康夫（京都大学名誉教授&元京大医学部ボート部部長）

熊本水頼先生が去る令和6年11月23日に逝去された報を頂き、親しき先生のご他界を深く悼み、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

昭和55年～57年頃の京大カヌー部部長は熊本教授であり、京大医学部ボート部部長は医学部整形外科助教授の上羽でした。その2人は京都大学内や瀬田周辺で屢々合流して新合宿所の設立について話し合っていました。当時、東海道本線が瀬田川を横切るすぐ北側に京都大学の所有地が在りましたが、その一部は既に滋賀医大ボート部に譲渡されて合宿所が建っていましたが、その横には古びて貧弱な京大カヌー部の艇庫が在りました。他方、京大医学部ボート部は大学創設の明治時代から長年に亘り瀬田川畔の「あみ定の隠居所」で合宿していたが、「あみ定」の火災で使用が不可能となりました。医学部ボート部員達は近所に在った小梅園などの個人宅を毎年お借りして合宿練習を続けていました。

当時の医学部ボート・コーチだった和田洋巳先生は瀬田川畔の土地を隈なく探索し、当時の京大カヌー艇庫の荒れ状態も報告して呉れました。カヌー部部長であった熊本教授も古い艇庫の建て替えを考えられたが、一つの運動部が単独で申請しても大学は受け付けて呉れる筈がなく、カヌー部部員と先輩だけで新築するのは経済的に不可能であると考えられていた。幸いにも、私は大学運営に関わって居られた医学部の翠川修教授、学生部次長の建本信雄氏と交流が有り、彼等の御厚意によって大学支援も得られました。学生部員は募金活動を行い、先輩諸氏から多額の寄付を頂きました。そして、昭和57年7月11日（日曜日）に沢田敏夫総長をはじめ、京大本部関係者、滋賀県漕艇連盟、京大カヌー部、京大医学部ボート部関係者など100名以上も集まり、祝福と喜びの中に瀬田艇庫竣工式が恙無く執り行われました。

新設艇庫は2階建であり、艇庫1階にはシェル・エイト艇が入り得る、艇庫2階にはカヌー部員とボート部員が共に合宿できるよう配慮され

ていました。竣工式の後、艇庫前で細やかなビアパーティが開催され、各関係者たちがお互いの友好を深め合いました。更に、乗艇会では桑名造船で造られたシェル・フォア艇に京大体育会会長やカヌー部部長の熊本水頼教授、そして多くのボート部先輩達が久しぶりにボートを漕いで楽しめました。瀬田艇庫竣工後は長期に亘って京大カヌー部と医学部ボート部の共同合宿場として使われましたが、多数の医学部ボート部女子部員と女子マネージャーが入部し始めて、次第に女性が増え続けたのです。それ故、京都大学ボート部艇庫・合宿所の隣に医学部合宿所を増設し、現在の部員合宿は其処で行うようになりました。従って、古い艇が瀬田艇庫に置かれているが、医学部ボート部員と京大カヌー部員との交流は少なくなってしまったのです。しかし、私達は今後とも京大カヌー部と医学部ボート部との友好を末永く継続して欲しいと願っています。

熊さんの思い出

清野 学 （1970 年卒）

大柄、骨太、色黒で、鋭い視線、腹の底から出るような太い声、大きな手の力強い握手、先生の第一印象全てから、頼りがいのある人柄であることが窺がわれました。

先生に最初にお会いしたのは、教養の体育の授業ではなかったかと思います。入学後5月の連休明けにカヌー部に入部して、先輩から、体育の授業は欠席するなということと、担当教官の一人がカヌー部の部長先生だということを聞かされました。先生の授業にはできるだけ出席しました。授業の中で、学生全員で腕立て伏せの回数を競うことがあり、先生とカヌー部の名誉に懸けて最後まで残りました。

先生の専門は運動生理学だったと思います。テーマは忘れましたが、先生の研究のためのデータ採取に駆り出されました。教養部の先生の研究室の前の庭に仮設のプールを設置してカヌーを浮かべ、体に何か所も電極を張り付けられ、固定したカヌーを漕がされました。場所を瀬田の漕艇場に移して、同様に電極を張り付け、呼気捕集用のマスクも装着して、今度は動くカヌーを実際に漕いでデータ採取を行うというものでした。カヤックの後ろの空洞に挿入した呼気の捕集袋が途中で満タンになり、苦しくてマスクの横から呼気を外に排出したので、正確なデータが採れたか心配したことが思い出されます。その時の研究論文の冊子を頂いていましたが、残念ながら行方不明です。

1970年頃の学生運動が燃え盛っていたころ、授業が長期間休講になっていたのを幸いにカヌーに明け暮れたことの成果もあり、4回生のシーズンは全日本でもそこそこの成績を挙げることができました。4回生の3学期だったと思いますが、アメリカでの赴任から帰国されて間もない先生から、次期ミュンヘン五輪の強化選手候補に挙がっていると連絡を受け、千載一遇のチャンスだからトライするよう強く奨められました。自分の実力をこれ以上に向上させる自信がないこと、五輪がまだ3年先であるこ

と、卒業に向けて勉学が疎かになっていることなどを考慮して、指名を断ることを先生に伝えました。今思うと、帰国後京大カヌー部の隆盛を目にすることを楽しみにされていた先生の期待に沿えなかったことを申し訳なく思います。

先生と、私と、私が勤めた会社の、特別な関係についてお話しします。前置きとして、先生は太平洋戦争中、舞鶴の海軍機関学校に在籍されていました。同校の化学の教官に、京大から派遣された河根誠教授と、神戸大学から派遣された小林正光教授がおられました。

私は、勉学に励んで卒業を目指すとしながら、結局は留年を重ねて大きく遅れて卒業し、研究室の教授から、友人が社長をしている化学会社に紹介していただいて就職しました。就職後に先生にお会いする機会があり、心配ばかりかけていた部員だったので、どんな会社なのか、旨くやれているのか、と気にかけていただきました。社長が京大工学部の化学の教授から転身した人で、河根という人ですと話すと、河根さんは海軍機関学校での恩師だ、河根さんのところなら安心だ、と言われました。

神戸大学の小林正光教授が開発した新規な化合物の工業化、市場開拓の案件が、海軍機関学校時代の同僚であった繋がりでも河根社長に託され、小林教授の御子息が新製品の開発を担うべく当社の研究所に途中入社して来られました。私がその人の部下になった時期があり、御父上が舞鶴の海軍機関学校の教官であったことを聞き、先生にお話しすると、小林教官も恩師だったと、思いがけない関係に驚かれていました。

このような関係で、河根社長が亡くなった時は、先生が海軍機関学校のOB会誌に、恩師河根教官の追悼文を書かれるというので、経歴についての資料をお送りしました。また、小林教授が亡くなった時には告別式の情報をお知らせもしました。

先生の海軍機関学校の関係で付け加えるならば、第21代京大総長の西島安則氏は同期生で親友だと聞かされています。カヌー部の初期からの木造の瀬田艇庫を現在の艇庫に建て替える際には、西島総長の支援を頂いたそうです。

コロナ前までは関東地区OB・OG会の新年会に出席して先生のお元気な姿に接していましたが、以後はお会いすることが叶わず、先生がやりたと言われていた「二関節筋」の講義も聞かないでお別れするのは誠に残念です。

熊本先生のご冥福をお祈り申し上げます。

現役時代の思い出

米田 憲二（1980 年卒）

熊本先生のご逝去にあたり、私のカヌー部現役時代（1975 年～1980 年）の先生との思い出を一生懸命思い出してみました。

私が主将を勤めていたこともあります。我々現役部員にとって熊本先生は大変大きな存在であったと思います。我々の時代は、もう先生自ら手取り足取り指導するといったことはありませんでしたが、殆どの試合は見に来ておられましたし、時には瀬田に顔を出して檄を飛ばされたりしていました。

先生が来られると少し緊張したのを覚えています。以下、私が先生について覚えていること、印象に残っていることを列挙させていただきます。とりとめもなく、また何分半世紀近い前のことで不正確のこともあり、先輩方からそれは違うとお叱りをいただくかもしれませんがご容赦ください。

1. 先生が繰り返し言われたこと

- ・「だいたい京大に入って、カヌーをやろうと思うこと自体がそもそも変わった人間だ。」
- 確かに同時代のカヌー部員には変わっているというか、純朴で世間ずれしていない人間が多かったように思います。そういったカヌー部員が先生は好きだったようです。
- ・西村先輩がインカレ1万メートルペアで優勝した話
「ピカイチ（西村先輩のこと）がきらきら輝く湖面を颯爽と先頭を切って戻ってきた」 ―先生はよほどうれしかったのでしょう。折に触れてこの話をされました。同時に 現役部員への叱咤激励でもあったと思います。
- ・野崎先輩がオリンピック候補選手になった話

「京大の体育会で、オリンピック候補選手を出したのはカヌー部だけだ。」 ―先生の自慢の一つでこの話もよくされました。

- ・熊本先生の師である高木先生が、カヌー競技を日本に持ち込んだ話
---申し訳ありませんが話の中身はよく覚えていません。ただ、日本のカヌー競技の草分けである高木先生から、その精神を熊本先生が引き継ぎ、ひいては京大カヌー部がそれを受け継いでいるということです。
- ・ドナルド・ドッジの話「世界チャンピオンでも事故に遭うことがある」
---カヌー部関係の皆さんはよくご存じの話で、毎年ドン・ドッジレガッタ開会のあいさつで、大変強く話され、我々も肝に命じたものでした。

2. 国際電話

ある年の関西インカレだと記憶していますが、試合中に某大学の部員が転覆、溺死するという悲しい事故が発生してしまいました。

先生はちょうど海外出張中でしたが、当時主将だった私は事故に大変ショックを受けたこともあり、これは先生に報告しなければいけないと考え、かけ方も全然知らない国際電話（今と違って色々複雑）にトライし、四苦八苦した覚えがあります。

何とか滞在先のホテルの交換までつながり、ミスタークマモトプリーズを連呼してようやく先生につながりました。後日「よく報告してくれた。」と褒められました。

3. ご自宅でのバーベキューパーティー

何回かカヌー部員を自宅に招いてバーベキューパーティーを催されました。普段、さほどいい食生活を送っていない我々にとっては大変ありがたく、また非常に楽しかったです。

田中先輩が、居間にあるピアノを突然引き始め、皆で聞きほれたことを覚えています。ある年のパーティーにはお知り合いのご令嬢が参加されており、胸をときめかしたこともありました。

以上は私の現役時代のことですが、卒業後も OB 会などで会う先生は全く変わらず、いつも元気で熱く語られ、こちらが気合を入れられっぱなしでありました。

熊本先生、本当にありがとうございました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

以上

柔の人

福岡 賢正 (1983 年卒)

1979 年にカヌー部に入った私が先生と初めて親しく言葉を交わしたのは、我々新入部員が集まって先生の研究室を訪ねた時だった。当時部長だった先生の姓が熊本であると知り、失礼になりはしないかと内心冷や冷やしながらかも、ひょっとしたらと思って自己紹介の折に振ってみた。

「農学部水産学科一回生の福岡です。出身は熊本県です。ところで先生のご出身は?」

「俺か? 俺は福岡県だよ。……そうか! 俺が福岡出身の熊本で、君は熊本出身の福岡君というわけだ。こりゃあいい」

そう言って大笑いされたおかげか、十人くらいいた新入部員の中でも真っ先に名前と顔を覚えてもらい、在学中はもちろん、卒業してからも随分気にかけていただいた。

三回生の秋に主将を引き継ぐと、大学側から艇庫建て替え話が持ちかけられた。最初はカヌー部単独のために建て替えるという話だったが、やがて医学部のボートと共同で艇庫を使う案が浮上し、最終的に艇庫を 2 階建てにしてその 2 階部分で合宿もできるよう整備し、二つの部と一緒に使うことになった。以後、具体的な設計や足りない資金の手当てなど、細かい部分を詰める作業が始まり、竣工、引き渡しを経て実際にふたつの部で使い始めるまで、主務の村田弘一君を補佐する形で慣れない対外的な交渉に当たった。

実を言うと、共同建設・共同使用案がどのようにして生まれ、本決まりになったのか、渦中にいた私自身、経緯は一切聞かされなかった。令和 6 年版の「河奴」に載った先生へのインタビューでその一端を初めて知ったが、インタビューの中でも先生はこの件について多くを語ってはもらえない。ただ、あの形に漕ぎつけるまでいろいろあり、先生のご苦勞が並大抵ではなかったのだということだけは読み取れた。

新艇庫ができるまで、部員たちは試合前になると毎回合宿場所を探して確保し、そのつど安価とは言い難い使用料を払わなければならなかった。さまざまな力学が働く大学内で、可能な限りウィンウィンになる落としどころはどこかと探った結果、先生がたどり着かれた最適解があのだっただろう。ただ当時はそんなこととはまったく知らず、「艇庫を建て替えてもらうのはうれしいけど、なんでこんなややこしい計画に振り回されなきゃならんのか」と、愚痴をこぼすありさまだった。とんだ世間知らずの罰当たり学生だったなあと、今振り返ると穴に入りたい気持ちになるが、そんな若造にも先生は苦労話ひとつされず、いつもあの大らかな笑顔を注ぎ続けてくださった。

海軍機関学校のご出身で大柄な体格だった先生に対し、当初は「剛の人」というイメージを持っていた。しかし実際にお付き合いさせていただくと、新入生の不躰な問いを大いに面白がり、様々な条件や制約の中で皆が折り合える解を探ってそれをしなやかさに実現させ、障害のある学生や若い研究者たちの支援を当たり前のことのようにごく自然に続けられるなど、人柄も生きる姿勢もとびきり柔らかい「柔の人」だった。

第一子である長女を授かった時、先生のお人柄にあやかりたくて、先生のお名前から「水」のひと文字をいただき、「水咲」と名付けた。「熊」の字をもらったのではちょっと娘がかわいそうというのもあったが、自在に形を変え、どんなものでも包み込むように受けとめる「水」こそ、「柔の人」である先生を象徴しているような気がしたからだ。

私の勤務地だった福岡市に先生が学会でいらした際、念願がかなって大学生になった長女を引き合わせた。先生は破顔一笑され、しみじみと語りかけてくださった。

「君のお父さんは熊本出身の福岡で、僕は福岡出身の熊本なんだ。その福岡君の娘さんである君の名前には僕と同じ水の字が入っていると言うじゃないか。まったくもって縁とは面白いもんだよなあ」

三人で盃を交わしたあの夜の思い出は、ずっと私たち親子の胸を温め続けてくれています。

熊本先生、本当にありがとうございました。

熊本先生を偲んで

小山 泰弘（1986 年卒）

熊本先生のご訃報に接し、謹んでご冥福をお祈りいたします。京都大学体育会カヌー部と OB・OG 会にとってかけがえのない恩人を失ってしまいました。昨年、久しぶりにご自宅にお伺いした際には、長い入院生活から退院されて徐々に体力を回復されていたご様子でしたのに、残念でなりません。

私が先生に直接ご指導をいただいたのは 1982 年にカヌー部に入部してからの 4 年間だけでしたが、その後も初漕ぎや OB・OG 会の集まりがあるたびに熊本先生のお言葉に元気をいただいていた。先生は、よく私たち部員や OB・OG にお話しいただくとき、君たちはカヌー部に入部したというだけでとてもユニークで見どころがあるとおっしゃっていたことを思い出します。そういった言葉だけでもずいぶんと励まされたことを、いまでもよく覚えています。「スマートで目先が利いて几帳面、負けじ魂これぞ船乗り」、「板子一枚下は地獄」という言葉もしっかりと耳に残っています。単に安全が大事、事故に気をつけろというだけではなく、常に少し先のことを予想してどう行動するかを考えて、しっかり行動することが事故を起こさないことにつながるということと私なりに解釈して心がけるようにしてきました。

昨年、ご自宅にお伺いして、6 年ぶりに現役部員が琵琶湖周航を復活させることを計画しているとご報告したとき、事故などが起こったりしないかずいぶんご心配をおかけしてしまったようでしたが、その後無事に事故もなくゴールしたことをご報告できた際には、大変喜んでいただいたと伺い、一安心いたしました。今後とも、京都大学体育会カヌー部の現役部員が安全にトレーニングと競技に集中できるように OB・OG 会としての役割を果たしていけるように気配りと支援をしてまいりますので、あたたかく見守っていただきたく、どうぞよろしくお願いいたします。

熊さんと向き合う旅

水嶋 勇（1988 年卒）

熊さんが亡くなって今日（2025 年 3 月 31 日）で 4 ヶ月あまり。3 年前に死んだ親父の月命日は覚えていても、熊さんの月命日はいちいち記録を繰らないと思ひ出せない。ご病気のことを知ってから亡くなるまでの数ヶ月も、亡くなってからのこの数ヶ月も、ずっと熊さんと向き合ってきたはずなのに。

「今朝伯父が亡くなりました」

姪の栗野路子（くわの・みちこ）さんからショートメールが入ったのは 2024 年 11 月 23 日の夕方。通信制で籍を置いている北白川の大学で本を借り、一乗寺にある馴染みの居酒屋で早めの一人飲みを始めてしばらく経ったころだった。

メールには、残された悦子さんの生活を路子さんが守っていくこと、葬儀はごく近親の人だけで営むことなどが淡々と綴られていた。

その時の感情を正確には思ひ出せない。ここから比叡山を越えれば、近江神宮近くの熊さんの家がある。すぐにでも駆けつけようか。でも酒臭い息で行ったら失礼になるだろう。ご迷惑を承知で路子さんに電話をかけた。大津市内の入院先で、看護婦さんが朝の巡回に訪れた時にはすでに呼吸がなかったとうかがったような気がする。ご自宅に帰る日どりや出棺までの日程も。ただ伝えられた中身は覚えていても、時系列に沿っては思ひ出せない。その場で小山さんや後藤さんに連絡を取ったと思うが、電話だったのかメールだったのかも記憶が定かではない。

2023 年 2 月ごろから、熊さんは腰の痛みを訴えるようになる。さらに悦子さんが日常的な介護が必要になったこともあり、その年の 9 月ごろから路子さんがお二人の世話を本格的に始めた。

2024 年 4 月、悦子さんがご病気で手術を受けた。5 月になって、腰の痛みで動けなくなった熊さんは救急車で入院。そこでがんの兆候があるとの診断とともに、余命 2 週間との宣告を受ける。ほどなくして病院での措

置に不満を持った熊さんは、自らの意思で半ば強引に退院した。その後、ケアマネージャーから紹介された往診担当の医師は熊さんを「97歳の末期がんのおじいちゃん」ではなく、尊厳を持った一人の人間として扱ってくれたという。この医師との出会いが、終末期をできるだけ在宅で過ごすという決意につながった。

6月下旬、事情を知らない水嶋が、以前からご相談に乗っていただいていた関学のK4の扱いについての経過報告のため、熊さん宅に電話を入れる。しかしすでにこの時点で熊さんは聴力が衰えており、十全なコミュニケーションが取れなかった。熊さんの携帯から「ただいま闘病中 代筆 姪の栗野路子」というショートメールが入ったのは7月2日。その後は路子さんと頻繁に連絡を取り合うようになった。

ご負担にならないように配慮しながら、後藤さんや小内さん、小山さん、大西さん、保志場さん、江盛さんに加え、関学の初期のOBの方など、関係者にお見舞いに来ていただくことができたのが7月から8月にかけて。路子さんによると、この前後のおよそ3ヶ月の間は、熊さんの好きな料理を路子さんが作ったり、お取り寄せを楽しんだり、心穏やかに過ごせたという。水嶋が9月にお邪魔した時には、直前にあったびわこ成蹊スポーツ大学によるカヌーの遭難騒ぎについて「安全性を軽視している」と、熊さんらしく憤りをぶちまける元気もおありだった。

その後、病状は徐々に悪化。ご自宅にいらながらもお見舞いを受けられなくなっていった。亡くなる2、3週間前には痛みを緩和する薬なども効かない状態になっていたという。最後まで在宅で過ごすという強い意志を持っていた熊さんが、耐えきれずに自ら救急車を呼んで入院したのが11月15日。悦子さんも路子さんも毎日、お見舞いに行っていたが、11月22日の夜に会ったのが最後となった。

路子さんからは熊さんの闘病中の様子をよく聞かせていただいた。大量の持ち物の整理や処分の指示をしていたこと。二関節筋の研究成果の普及にずっと意欲を持っていたこと。お子さんのいなかった熊さんは、路子さんの3人の息子さんたちをことのほか大切にしていた、路子さんを介して二関節筋の話題などいろんな話しをしていたこと。そして、弱っている悦

子さんを気遣い、優しく接していたこと。葬儀からその後に至るまで、どう扱ってほしいかということ熊さんは路子さんに伝えていた。遺骨は半分を故郷・福岡の墓に、半分は海軍機関学校のあった舞鶴の海に散骨してほしいと。

路子さんは最近、熊さんの言葉をメモしていたものを整理していて気づいたことがあるという。「舞鶴での散骨」の隣りには「申し出あれば瀬田川でも」と書かれていた。

熊さんが亡くなった後に経歴を調べていて、戦後の一時期、熊さんが、九州大学で学んでいたことを知った。そのころのことをご本人の口から聞いたことは一度もない。ただ路子さんに口述筆記させた「2024.11.13 大津一市民の既存宗教を超越した宗教哲学」と題した一文は「序：1946年、熊本は画期的研究成果を得て」という書き出しから始まる。この時、熊さんは何を発見したのか。今となっては直接、確かめる術はない。

熊さんの人生は98年間。水嶋が直接お付き合いをさせていただいたのは、還暦手前からの40年ほど。知らないことのほうが多いのは当たり前だ。

熊さんの残してくれたものと向き合う旅は、これからも続いていく。それが水嶋にとってのグリーフケアになるんだと思う。

ショートメッセージ

偲ぶ会の参加申し込みの際にいただいたメッセージをご紹介します。

植田賢太郎さん（関西学院大学カヌー部 OB）

昭和 37 年欧州派遣選手選考会に向けての瀬田での合宿で出会いお世話になりました。

小内勝雄さん（1967 年卒）

先生に訓示されました NOBLE OBLIGATION の精神忘れません。
安らかに眠りください、有難うございました。

中井雅夫さん（同志社大学カヌー部 OB、公益社団法人日本カヌー連盟副会長）

私は同志社大学カヌー部在籍中に大変お世話になりました。4 年時主将の時には京都大学で身体測定検査や、様々なお話を聞かせていただきました。



艇庫前に行く一番丸（イラスト：岡部哲郎）



旧艇庫（イラスト：岡部哲郎）



瀬田の唐橋（イラスト：岡部哲郎）

熊本先生を偲ぶ会のご報告

2025 年 4 月 5 日（土）、穏やかな春の日差しに恵まれ、偲ぶ会第 1 部は琵琶湖大津館で執り行われました、第 2 部は同館裏の栈橋から出港した貸し切りの遊覧船で浜大津から瀬田川をクルージングしながら執り行われました。

第 1 部のご報告

琵琶湖大津館は 1934 年に滋賀県初の国際観光ホテルとして建築され、琵琶湖の風情と調和した和風の概観で多くの賓客をもてなしてきました。2002 年からは大津市の文化施設として再整備され、市民の交流の場として活用されています。熊本先生の御自宅からこの大津館まで直線距離で 1.3km、熊本先生もしばしばご利用されていたようで、偲ぶ会の第一部を開催するのに最もふさわしい場所でした。



琵琶湖大津館（撮影：：高田宣武）

参会者の内訳は、熊本先生ご遺族とご親戚 3 名、海軍機関学校関係 4 名、洛東高校関係 2 名、二関節筋研究関係 8 名、京都大学関係 2 名、カヌー関係（京大以外）20 名、京大カヌー部 OB・OG 会（同伴家族を含む）49 名、同現役部員 15 名、計 103 名でした。

第一部は会場に熊本先生の悦子令夫人とご親戚の栗野路子様・水希様、関口礼子様をお迎えし、14 時 30 分に開会、最初に京都大学カヌー部 OB・OG 会会長小山泰弘が主催者挨拶、趣旨説明、熊本先生の経歴紹介を行いました。

次いで、故人をしのんで参会者全員で 1 分間の黙祷を行いました。



小山会長からの主催者挨拶、趣旨説明、熊本先生の経歴紹介（撮影：横井隆）

その後、故人と様々なご関係があった 6 名の方から追悼のスピーチをいただきました。その要旨を以下に紹介します。

中井雅夫さん（同志社大学カヌー部 OB、公益社団法人日本カヌー連盟副会長）

熊本先生からは、やさしく時には厳しく声を掛けられ、創部間もない同志社大学体育会カヌー部を支援いただいた。ある日夜分にご自宅を訪問

し、当時は大変高額であった映写機機材の貸与をお願いした時にも快く提供いただいた。私が腰を痛めた際にも当時は大変珍しかった電気治療を高木公三郎先生と共に施していただいた。練習内容の相談にも行き、京大グラウンドで、体力測定や練習メニューを教わった。50年の年月が経ちますが、感謝をするばかりである。ありがとうございました。

川上純一さん（関西学院大学カヌー部 OB 会元副会長）

1年生の瀬田での試合のことだった。表彰式を終えた後の講評で沈をして艇から離れた選手がいたことに触れ、どの様な状況になっても艇から離れないことがウォーターマンシップの基本であると諭されたことに感銘を覚えた。熊本先生には塚本先輩の結婚式や関学カヌー部の50周年パーティに出席いただき、温かいご挨拶をいただいた。関西の学生カヌー界ではお父さんのような人である。10年前、京大OBの水嶋さんから、京大で開催しているドン・ドッジ・レガッタの意義を説明いただき、改めて熊本先生のカヌーへの思いの熱さを認識した。

四方伸明さん（関西医大体育会カヌー部 OB 会長）

熊本水頼先生を一言で現せばダンディーな熱血漢。昭和53年関医大カヌー部の岡本勉顧問が米国留学中に淀川で裁判にもなった死亡事故が起きた。当時のOB会をサポートして下さったのが熊本関西学生カヌー連盟会長と関医大学生部長大山昭夫教授であったが、対応するうち、この両先生が奇しくも舞鶴海軍機関学校同門であることが分かったのだった。不幸な出来事ではあったが思わぬ縁であった。熊本先生と岡本先生は日本にカヌーを導入された高木公三郎先生の体育理論の後継者であったが、関西学生カヌー連盟も引き継がれた。

最後に熊本先生を拝見したのはTVでシーラカンス胸鰭二関節筋を解剖するお姿でした。

後藤洋三さん（京都大学カヌー部 OB・OG 会元会長）

追悼文集編集のため、熊本先生の生涯を改めてたどらせていただき、熊本先生には青春が4回あったと感じている。一回目は海軍機関学校時代、二回目は京都府立洛東高校の教師時代、三回目は京都大学定年退官後の富山県立大学時代、そして四回目はすでに70歳代後半から80歳代になっておられたが、精密学会と電気工学会に生体機構制御・応用技術専門委員会を設置し、東京で若い気鋭の研究者と2か月に1回ほどの頻度で研究会を開催されていた時代である。それぞれの青春についてはこの後のスピーチとメッセージのなかで紹介されるのでご傾聴ください。

福井圭子さん（京都府立洛東高等学校 第一期生）

新設高校における熊本先生の授業は、中学時代の理科の授業とは全く異なり、多くの実験とレポートを含むものであり、早口の講義にも感銘を受けました。熊本先生は写真部の顧問もされており、私は写真部の部室の近くでピアノの練習していた関係で写真部の撮影旅行について行っていました。帰りに河原町のミュンヘンや築地（老舗喫茶店）に立ち寄ったことを懐かしく思い出します。その様な先生を囲む会は卒業後も続き、やがて家族とともに正月2日に先生のお宅で新年会をするようになりました。その際、10時に集まっても先生はご不在。先生はカヌー部の初漕ぎ会だったこととお聞きし、京大カヌー部の活動を知りました。先生の生徒や学生を思う熱い心や活動にたくさんのものをいただきましたことに深く感謝しております。

藤川智彦さん（大阪電気通信大学教授）

富山県立大学の大学院で熊本先生の御指導を受けて進めてきた二関節筋の制御機能のご研究の成果をPPTを使って説明された。これらの研究成果は大阪電気通信大学において工学博士3人の育成につながり、熊本先生の御指導に本当に感謝している。

古関隆章さん （東京大学大学院教授）

熊本先生の東京でのご活躍を紹介したい。古関がまだ駆け出しの助教授だった頃、熊本先生が幹事をされていた研究会に関し幹事同士のメールをやり取りしたときには若い方と思い込んでいた。しかし、実際にお目にかかり、実は京都大学の 80 歳近い長老の名誉教授、白河上皇の様な方であることを知り大変驚いた。その熊本先生のご指導の下、ロボットアームで二関節筋の役割を果たすリニアモータの開発を試みた。それ自体は、重さの壁を解決できず実用に至らなかったが、その時の着想や努力は、現在、多方面の研究開発に繋がった。

熊本先生の研究会で、福祉関係者も含む多様な研究者と悠久の生物の進化と人工物に係る技術との関りについて深く考え議論する時間を持てたことは、研究者として視野を広げるうえで得難い経験となっている。さらに、何度も本郷に足を運んでくださり、学生たちに温かい心で接し親しく熱く語ることを通じ、若手の研究への思いを高めてくださったことに深く感謝している。

次に、本日の偲ぶ会に出席が叶わなかった方から寄せられたメッセージの紹介がありました。

福井 勉さん （文京学院大学学長）

先生には二関節筋、実効筋について教えを受け、単関節筋と二関節筋の機能の違いについて、また、研究に対する心構えと熱意をご教授を受けました。先生のご冥福をお祈りいたします。本当にありがとうございました。

植田賢太郎さん （関西学院大学カヌー部 OB）

昭和 37 年欧州派遣選手選考会に向けての瀬田での合宿で出会いお世話になりました。

新光聡子さん （海軍機関学校同期の故新光毅様のご令室）

主人が一番信頼を寄せていた頂いた方だと思います。京都での三金会、楽しみに出席しておりました。奥様ともども大変お世話になりました。

藤井健一さん （公益財団法人ふくしま海洋科学館飼育展示部）

いつまでもお元気でいてくださると思っておりましたので、ご逝去のお知らせにただ驚くばかりです。水族館でのナメクジウオの二関節筋運動解析、シーラカンス研究では大変お世話になりました。まだまだこれから先生のご助言が必要な時でしたが、天国でも見守っていて下さい。

安達靖二さん （海軍機関学校学年教官のご子息）

父親が海軍機関学校の学年教官をしていました。クラス会がある時にお会いしておりました。本当にいろいろとお世話になりましたただただ感謝です。ありがとうございました。

清木孝悦さん （学校法人文化学園理事長・文化学園大学学長・京都大学カヌー部 OB）

前略・・・熊本先生には現役時代は勿論ですが、卒業後文部省（現文部科学省）に入省して以来も大変お世話になりました。時々訪問してくださり、二関節筋の模型をお持ちになって研究費の相談に来られたこともありました。そして私の公務員人生最後に京大理事に赴任していた際には何度も京大にお出でになり、夕食をご馳走になりながら、カヌー部創設の頃、比叡越えで艇を京大に運び、グラウンドに水を張って部員募集のパフォーマンスを行ったことなど、貴重なお話を伺ったこともありました。・・・後略

仙頭 泰さん （海軍機関学校同期）

前略・・・貴兄にはクラスの人たちの世話をよくしていただいた。貴兄は、単にクラス会のみならず、他の多くの集まりをも世話をして、世のために尽くしていただいた。その徳を慕うものは数知れずおられた。現に、今行

われている「熊本水頼先生を偲ぶ会」を見てもそのことはよくわかる。・・後略

次いで、京都大学カヌー部 OB・OG 会副会長水嶋勇氏が 10 年ほど前に撮影していたアーカイブから編集した動画「熊本先生が私たちに伝えたかったこと」が披露されました。水上スポーツの安全性への熊本先生の思いとドン・ドッジレガッタの由来、アマチュアスポーツとしての学生カヌーの大切さ、そして次の世代への期待が込められた内容でした。



動画投影の様子 (撮影：横井隆)



ドン・ドッジレガッタ優勝カップ
(撮影：萩野光明)

ドン・ドッジレガッタの由来：1962 年当時の全米チャンピオンで東京オリンピック出場が確実視されていたドナルド・ドッジが北米オンタリオ湖で練習中に亡くなった。それを聞き及んだ熊本先生が父親のレイモンド・ドッジと連絡を取り、日本に来ることを楽しみにしていた同選手への慰霊と全米チャンピオンでも水の事故で亡くなることがある戒めとして、1963 年にレガッタを創設された。現在は京都大学体育会カヌー部の行事として毎年開催されている。

そして、熊本悦子令夫人へ野崎京子さん（京都大学カヌー部 OG）より、また晩年の熊本先生をお世話いただいた姪の栗野路子さんへ小山泰弘さんより哀悼と感謝の意を込めて、花束贈呈が行われました。



花束贈呈 （撮影：横井隆）



栗野水希君による琵琶湖周航の歌の伴奏（撮影：横井隆）

最後に、悦子令夫人からお礼の言葉をいただき、熊本先生の姪孫にあたる栗野水希君の伴奏で、参加者全員が「琵琶湖周航の歌」を斉唱して第一部は終了しました。

第1部 文責 後藤洋三

第2部、琵琶湖瀬田川クルージング（観光船：一番丸貸切）での懇親会

16：30 に大津館前柳が崎棧橋から出港。まずは船内に全員集合。周囲に座席、中央テーブルにケイタリングの料理、一面にバーコーナーの配置部屋は参加者 50 数名でちょうど良い広さ、屋上デッキに出ると景色も堪能できる。

1987 年卒業の大西さんの司会で開始。

1972 年卒業の西村前会長より開会のご挨拶：偲ぶ会の準備に関係したメンバーへの謝意の後、先生が指導してくれた科学的トレーニングの話があり、本日は皆で語り合いましょうと話しをいただいた。

1972 年卒業の石田さんよりスピーチと献杯の音頭：会長以下設営者への謝意の後、亡き先生へ語りかける口調で、長きにわたり数えきれない思い出をいただいたこと、先生のご遺志を引き継ぐので見守ってくださいとお話しされた。

1969 年卒業の有山さんよりスピーチ：創部期に入部したが一気に部員が増え全盛期を迎えた。当時先生は研究のためアメリカにおられましたが、試合の度に良い戦績の報告が出来て、大喜びの様子でした。偲ぶ会第一部の先生のビデオにもあったように、先生からは安全への配慮について強くご指導いただいた。私はカヌー連盟の仕事をしてきて、いまでもサポート役をしている。幹部の方は最後までやり切ってくださいとお話しされた。

以降、食事をとりながら自由歓談。

料理は地元料亭より仕出し、煮物・揚げ物・焼き物・鮓他でほぼテーブル一杯。お酒も地元酒屋にて船へ配達、熊本先生レシピのカクテル＜ロブ・ロイ＞＜ラブフォーティ＞の他、日本酒、ウイスキー、焼酎「いいちこ」は大分畔津さんからの差し入れ。天気は曇りだが風はなく河岸の桜は満開だったが、飲み食い歓談に忙しく屋上デッキに出た鑑賞者は多くはなかった。復路途中、瀬田川新港に一時寄港、早帰り組の数名下船。最後は琵琶湖周航歌を 1 番から 6 番まで円陣を組んで合唱、盛り上がった。

18：20 に柳が崎棧橋に無事帰還。第2部終了し、解散。



琵琶湖大津館裏の栈橋より乗船



始まるまでじっと我慢



京都大学カヌー部 OB・OG 会
前会長西村光一さんよりご挨拶



石田裕貴夫さんによる乾杯の音頭



有山行基さんよりご挨拶



琵琶湖周航の歌の合唱

第 2 部文責 岡部哲郎

(このページの写真はすべて横井隆 撮影)

主将挨拶

主将 福永 健太

2024 年度 9 月より、京大カヌー部主将を務めさせていただいております、農学部資源生物科学科 4 回生の福永健太と申します。2025 年 2 月より、作物学研究室への配属が決まりました。

OB・OG の皆様におかれましては、日ごろからの多大なるご支援、ご声援をいただいておりますこと、感謝申し上げます。今年も夏の大会に向け、部員一同精一杯活動してまいりますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。また、先日は熊本先生を偲ぶ会に現役部員をお招きいただきましてありがとうございます。このような機会に熊本先生という偉大な方について知ることができたのは大変貴重な時間となりました。

昨年度の新歓活動を経て、現在シニアプレイヤーがカヤック 9 人、カナディアン 3 人と、カナディアンが少ないのは嘆かわしい現状ではありますが、私の入部以降最多となるシニアプレイヤーの人数で、切磋琢磨しながら日々の練習に取り組んでおります。乗艇後も、自主的に筋力トレーニングに励む部員が多くなり、2 階までトレーニング器具の音が聞こえてくるのも日常茶飯事となり、自分としても意識の高い後輩たちに刺激される毎日です。

さて、京大カヌー部の現状として、経験者の不足やテクニック面の知識といった点は長年の課題となっていましたが、今年 2 月にはかつて行われていた瀬田川での合同合宿を各大学の主将、副将を中心に話し合いが行われ、京大・同志社大・関西学院大・神戸大・慶應大の 5 大学で開催されました。他大学の優れた選手から競技について教えを乞うたり、共に練習をするなどして、多くの部員が刺激を受けたのではないかと思います。非常に寒い時期での開催ではあったものの、私としても大きなモチベーションになりましたし、有意義に過ごすことができました。また、実際に他大学の選手とコミュニケーションをとることで大学間での親交を深めるこ

とにもつながったと感じており、来年以降も瀬田川での合宿以外にも他大学との交流は定期的開催されていってほしい思っております。

最後になりますが、私たち現役部員が日々の練習に集中できるのもOB・OG様の大きな支えがあつてのことです。間もなく夏の大会が迫ってきており、部員の意識も更に上がってきているのをひしひしと感じています。今年のインカレが山形県の月山湖での開催ということもあり、幾らかの懸念はありますが、今後も練習に励んでいく所存ですので、皆様のお力添えを頂けるようお願い申し上げます。

主務挨拶

主務 森川 宏亮

今年度主務を務めさせていただいております、工学部地球工学科4回生の森川宏亮と申します。

初めに、OB・OGの皆様におかれましては、日頃より現役生の活動へのご理解及びご支援を賜りまして、誠にありがとうございます。

私がカヌー部に入ってから丸3年が経ちましたが、コロナはもちろんのこと、遠征費の高騰や部員数の減少など、様々な困難があった中においても充実した活動を続けてこられたことは、皆様の温かい応援なしにはありえなかったものと強く感じております。今後とも応援のほど、何卒よろしくお願いいたします。

ここでは今シーズンの目標について書かせていただこうと思います。まずプレイヤーとして、K-1 1000mの種目においてインカレに出場することを目標にしています。東西の関カレ（関西学生カヌースプリント選手権）がインカレの予選を兼ねた大会となっているのですが、そこで昨年度まではインカレの出場ラインに届かず、悔しい思いをしてきました。最後の年に出場できるよう、残り10週間ほどの期間ですが精一杯練習に取り組んでいこうと思います。

次に主務としては、夏の大会と遠征を円滑に終えることを目指しています。今年度の夏の主要2大会のうち、関カレはここ数年と同様音水湖で行われますが、インカレについては山形県の月山湖という誰が得になるのかよくわからないところで行われることとなっており、トラックの費用や交通費など、主に遠征費の高騰という意味で難しい年だと感じています。また費用だけでなく移動の行程などの遠征の計画全体について、主務として部全体がうまく大会に臨めるように準備したいと思っています。

以上の目標を念頭に残りの期間頑張っていきますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

モチベーション

3 回生 楠井 隆

こんにちは。3 回生の楠井隆です。カナディアンを漕いでいます。最近
は夏の大会に向けて、1000m のメニューが中心になってきました。

そんな中、後輩に勝てないことが増えてきました。彼らは着実に速くな
っているのに、自分はあまり成長を感じられず、「このまま置いていかれ
てしまうのでは」と不安になることもあります。頑張っても追いつけない
と感じる瞬間が、以前より多くなりました。

そういう時、自分を奮い立たせるために思い出すことがあります。中学生
の頃、水泳部に入っていた時のことです。親に勧められて始めた水泳でし
たが、ほぼ毎日の練習はとてもきつく、辞めたくなる日もたくさんありま
した。それでも 3 年間続け、最後の大会ではクロール 50m で、最初は 45
秒だったタイムが 31 秒まで縮まりました。

当時は 20 秒台の上位選手ばかりを見て、自分の遅さに失望し、練習中
も「もう辞めたい」とばかり考えていました。でも、結果的には部内で 2
番目に速くなれるまで成長しました。

今思えば、もっとポジティブに、もっと本気で練習に向き合っていれば、
2 年で 31 秒、3 年目には 20 秒台も目指せたかもしれないと思っていま
す。

だから今、後輩や同時期に始めた選手に追いつけないと感じたときで
も、「ここで諦めてはいけない」「今こそ頑張るときだ」と、自分に言い聞
かせて全力で漕ぐようにしています。中学時代に「頑張りがれなかった」
自分を思い出し、今回は後悔しないようにと自分を奮い立たせています。

自分はそんなふうにしてモチベーションを保っていますが、他の人がど
のように気持ちを維持しているのかも気になります。もしかしたら、モチ
ベーションの維持に悩むよりも、ただひたすら速く漕ぐことこそが、成長
への一番の近道なのかもしれません。

カヌー部に入って 2 年。今が踏ん張りどきです。4 回生の大会で結果を

出すためにも、まずはこの3回生の夏の大会で、1000mを4分30秒台で漕ぎきりたい。その目標のために、残り2ヶ月、意味のある時間を過ごしていきたいです。

カヌー部生活 1 年を経て

2 回生 吉中 凌

経済学部 2 回生カヤックの吉中凌と申します。OB・OGの皆様におかれましては日頃より多大なるご支援、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。これからもご助力のほどよろしくお願いいたします。

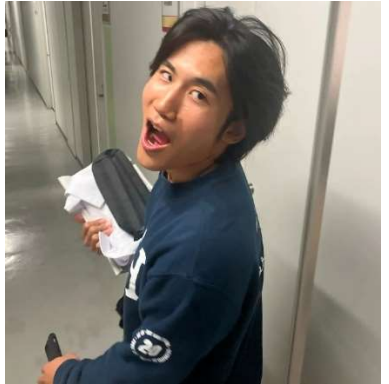
入部してから早くも 1 年がたち、時の流れの速さを感じています。私がカヌー部に入部したきっかけは大学では経験したことのないスポーツをやりたいという思いでカヌー部の試乗会に来たことです。思っていた以上にバランスをとることが難しいカヌーの魅力にみせられて入部を決めました。入ってからは個性豊かな先輩・同期と日々研鑽しつつ、楽しく充実した艇庫ライフを送ってきました。もちろん、楽しいことばかりではなく練習がきつくてしんどい時もありました。特に冬の練習は長距離のメニューが主なので寒さに凍えながら長時間漕ぐこととなり身体的にも精神的にもきつかったです。しかし、そんなときにはいつも初心にかえって(まだまだ初心者ですが)「カヌーを楽しむ」ということを思い出すようにしていました。漕ぐことそのものを楽しみ、日々の成長も楽しむ。1,2 週間を経るたびに 10km のベストタイムをノートに記していくのは練習終わりの楽しみの一つとなりました。

ジュニアとしての 1 年が終わり、今年度からはシニアとして大会で上回生や経験者とも戦っていくことになります。彼らに勝つのは簡単ではありませんが本番で全力を尽くせるよう、全身全霊でやりきったと言えるよう、日々の努力を大切に練習に励んでいきたいです。これからも精進してまいりますので今後ともよろしくお願いします。

部員紹介

<4 回生>

岡安 晴信	京大カヌー部の絶対的エース。ではあるが、それ以外のコミュニティに馴染めずに悩む。最近、研究室に行けたり行けなかったり。	
副将		
カヤック		
農・森林科学		
東京学芸大学附属		

福永 健太	主将。去年から筋トレに力を入れた。よく大学のジムにいる。最近、艇庫で院試勉強の道具を広げる（広げるだけ）のがかっこいいと思ってる。	
主将		
カヤック		
農・資源生物科学		
熊本		

森川 宏亮	同期・後輩問わず、「もっさん」と呼ばれて親しまれている。理由は様々だが、引退後もカヌーをする。好きな言葉は君に王手。	
主務		
カヤック		
工・地球工		
光泉カトリック		

<3 回生>

楠井 隆	カナディアン長として、後輩から慕われている。悪気は全くないが、時折挙動が不審だったりする。	
学連		
カナディアン		
工・電気電子		
旭丘		

栗島 大和	この部で最もさわやかにふるまうことができる。最近は就活をはじめた。女人事の心をつかみ、数多の大手内定を目指す。	
新歓大臣		
カヤック		
文		
旭丘		

藤本 航成	先輩力，後輩力が高く，艇庫ライフを満喫している。な眼に“森”がつく人とは特に仲がいい。	
副務		
カヤック		
理		
神戸		

<2 回生>

荒尾 陽介	数学のことしか考えていなさそうだが，そうでもない。化学系も視野。ゲームをしているときが一番元気。	
ホームページ		
カヤック		
理		
明和		

安藤 諒	報告, 連絡, 相談を欠かさない真面目な2回生. カヌー・筋トレも勉強熱心で知識のアップデートを欠かさない.	
Instagram		
カナディアン		
経済		
岐阜		

坂井 一稀	育ちのいいかわいい後輩. のはずだったが, 最近カヌー部に悪い意味で毒されている気がする. 今後の成長が楽しみである.	
体育会本部員		
カナディアン		
工・物理工		
六甲学院		

田中 伸弥	先輩・同期・後輩から「シンヤさん」と呼ばれ敬われており, 人徳でかなうものはいない. 日々ビデオで自分の漕ぎを振り返るのが日課.	
トレーナー		
カヤック		
工・地球工		
天王寺		

南 亮汰	部のマスコットキャラクター。睡眠を確保すべく、艇庫まで蹴上駅を経由する最短ルートを開拓した。マリオカートがめちゃくちゃ得意。	
YouTube		
カヤック		
工・理工		
四日市		

吉中 凌	見た目はさわやかであるが、裏の顔があるとかないとか噂されている。この部にしてはかなり上品。	
副務		
カヤック		
経済		
桃山学院		

越智 夢生	客観的に苦しい単位数を苦とせず朗らかに過ごしている。 今年は阪神タイガースが強く上機嫌。見た目によらず結構ヤジも飛ばすらしい。	
X(旧 Twitter)		
マネージャー		
経済		
立命館		

<1 回生>

三木 信太郎	唯一の1回生プレイヤー。積極的に先輩から漕ぎ方を教わる期待のホープ。入学前から、カヌー部のブログを読んでいたらしい。	
カヤック		
理		
西大和学園		

戦績報告（2024/08~2024/11）

※京都府選手権，全日本学生カヌー長距離選手権大会につきましては，悪天候により大会中止となりました．また，一部部員が関西カヌースプリント選手権大会に参加しましたが，大会記録を保存しておらず，報告いたしかねますこととお詫び申し上げます．

関西学生カヌースプリント選手権大会（08/08~08/12 兵庫県 音水湖）

1000m

K4 F

6位 福永・森川・岡安・山広

500m

K-1 F 500m×4 Relay

6位 岡安・藤本・山広・栗島

JK-1 F

4位 吉中

5位 田中

6位 南

JK-2 F

2位 吉中・田中

3位 荒尾・南

JC-1 F

1位 坂井

3位 安藤

4位 京田

JC-2 F

1位 京田・坂井

200m

JK-1 F

4位 田中

6 位 吉中

7 位 荒尾

8 位 南

JC-1 F

2 位 坂井

3 位 京田

4 位 安藤

全日本学生カヌースプリント選手権大会 (08/27~08/30 石川県 木場潟)

1000m

K-4 F

9 位 福永・山広・栗島・藤本

500m

K-1 500m×4 Relay F

7 位 栗島・藤本・福永・山広

JK-1 F

5 位 田中

6 位 吉中

JK-2 F

4 位 吉中・荒尾

6 位 田中・南

JC-1 F

1 位 坂井

200m

JK-1 F

6 位 田中

7 位 吉中

9 位 荒尾

JC-1 F

1 位 坂井

2 位 安藤

Head of the Seta (11/08~11/09 滋賀県 瀬田川)

K-1

- 15 位 岡安
- 17 位 田中
- 19 位 藤本
- 20 位 福永
- 21 位 荒尾
- 22 位 吉中
- 23 位 南
- 25 位 森川

K-2

- 8 位 藤本・田中
- 9 位 岡安・荒尾
- 10 位 福永・山広 (OB)
- 11 位 森川・南

C-1

- 7 位 楠井
- 11 位 坂井
- 12 位 安藤
- 14 位 京田

C-2

- 5 位 楠井・京田
- 7 位 坂井・池端 (OB)

編集後記

「河奴」37号をお届けします。今回の河奴はOB・OG会のみなさんの一般の投稿を募集することを控えまして、惜しまれながらご逝去された熊本先生の追悼特集を組むことといたしました。追悼文集に寄せられたカヌーにゆかりのある方々の追悼文を掲載しております。京大カヌー部OB・OG会のみなさまの寄稿に加え、元ボート部部長の上羽様、関西学院大学OBの紅林様と川上様、関西医大OBの四方様からもご寄稿をいただき、感謝申し上げます。また、4月5日に開催した偲ぶ会の様子のご紹介も掲載いたしました。会の趣旨に賛同いただいてご参集いただいた多くのみなさまにあらためて感謝申し上げます。会の運営で至らないところもあったかと思いますが、ご容赦賜りますようなにとぞよろしくお願いいたします。

今年の新入部員数は少々心細いですが、OB・OG会をあげて入ってくれた新入部員を大歓迎します。熊本先生は、よくカヌー部を選んだというだけでとてもユニークで見どころがあるとおっしゃって下さっていました。現役部員のみなさんには、この言葉に励まされてカヌー部の歴史を紡いでいっていただけることを願っています。

2025年（令和7年）6月

小山 泰弘

河奴37号

2025年6月15日発行非売品

発行 京都大学体育会カヌー部 OB・OG 会
代表者 小山 泰弘